日常生活史 ── K氏の場合

「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける労働者の日常生活」(その十一)

宝　福　則　子

はじめに

本稿は,『人文研究』第91・97・98・99・101・103・105・107・108・113輯に続く,「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける労働者の日常生活」のインタビュー資料分析シリーズのひとつである。この資料の由来や分析方法等については,第91輯を参照されたい。

今回利用した,当該資料は,1980年3月25日の15時から16時30分までと31日の10時30分から12時まで,K氏の女友達であるガーレ夫人の家で行われたインタビュー内容を,A 4タイプ用紙80ページに書き起こしたものである。

1903年2月2日	ブラウンシュヴァイクで誕生
1917年〜1928年	アンメ・ギーゼッケ&コーネゲン社で工作機械用旋盤工
1931年〜1932年	失業
1921年〜1933年	ドイツ金属労働者連盟組合員
1931年8月8日	ブリキ工場女性労働者と結婚

父:1868年にヴォルフェンビュッテル近郊のリンデンで誕生,1945年にブラウンシュヴァイクで死亡。
職業は,1895年から1932年まで,アンメ・ギーゼッケ&コーネゲン社で車大工として従事した後,1932年から1933年まで失業。
木工労働者連盟およびドイツ赤十字会員。

母：1869 年にブラウンシュヴァイクで誕生，1961 年にブラウンシュヴァイクで死亡。
職業は家事手伝い，結婚後は主婦。未組織。
出産が 6 回，流産が 2 回。

1．両親について

私の父は 1868 年 4 月 28 日にヴォルフェンビュッテエル *Wolfenbüttel* のリンデン *Linden* で誕生しました。そして，グロース・デンクテ *Groß-Denkte* という村で車大工の仕事の修行を終えた後，ブラウンシュヴァイク *Braunschweig* のある車大工の親方の仕事場で働き始めたわけです。ずっと車大工をしていて，1895 年に，ここの MIAG 社，── あるいはアンメ・ギーゼッケ&コーネゲン社 *Amme, Giesecke & Konegen* と言ったらよいのでしょうか ── が創設されたので，そこで働いたのです。父の当時も，学校は，今のように 8 年間でした。そして，4 年間の修行期間がありましたから，父は 1886 年にブラウンシュヴァイクに来たのだと思います。彼は車大工の熟練工でしたが，親方にはなりませんでした。国民小学校は村で終えたのです。

父はグロース・デンクテ村の親方の元で，1882 年に 14 歳で徒弟修行を始めました。修行は 82 年から 86 年までです。親方はシュテットラー*Stedtler* という名前でした。シュテットラーは，車大工の親方でした。その後に，父はブラウンシュヴァイクへ出て来たのです。彼は，最初はグリースマローデ *Gliesmarode* の車大工の親方の元で働きました。父は，そこで起こったことをいつも語ってくれました。つまり，1890 年にここで激しい雹（ひょう）が降ったのです。作物が被害を受けてしまいました。鳥がみな死んでしまいました。ドイツ中のガラス職人が，割れた窓ガラスを入れに走り回らなければならなかったほどなのです。穀物類は倒れて，畑は平らになってしまいました。とにかく，1890 年には，ものすごい雹が降ったのです。その時，私の父はまだグリースマローデの親方の元で働いていたのです。そして 1893 年 4 月に両親

は結婚しました。その後，95 年に MIAG 社が操業開始したので，父は MIAG 社へ入ったのです。

MIAG 社は，昔はアンメ・ギーゼッケ＆コーネゲン社という名前でした。父は，1932 年末に 64 歳になるまで MIAG 社で車大工として働き続け，失業しました。私は，その時，もう結婚していましたが，父は 64 歳だったので，1 年後の 1933 年には，65 歳になって年金を受けるようになりました。1 年間，失業していて，65 歳で年金生活に入りました。会社が配置換えをし，年寄りは無用になって，放り出されたというわけです。つまり，会社は定年の 1 年前に彼を首にしたのです。彼は 65 歳になるまでは，まず失業手当をもらいに通い，65 歳ではじめて普通の年金を受けたのです。家族は，彼の失業手当で質素に生活していました。母が働きに出るということもありませんでした。

母には 4 人の子供がいたので，家から出ることはありませんでした。父は母との結婚前に他の女性と結婚していたこともありませんし，私生児もいません。彼の人生は，まったく単純なものでした。父が私生児であったということもありません。私の両親は 1893 年 4 月 28 日に結婚しました。ちょうど，父の誕生日です。この日付けについては，ちょっとしたエピソードがあるのです。つまり，私の祖父が，結婚は 25 歳になってからするものだという立場だったので，父は 25 歳の誕生日がくるまで結婚を待っていたのです。だから父の結婚式と誕生日が同じ日付けなのです。結婚したのはブラウンシュヴァイクでした。結婚と同時にエルンスト・アンメ通り *Ernst-Amme-Straße* 30 番の住居に引っ越しました。両親は教会で結婚式を挙げました。新教のペトリ教会 *Petri-Kirche* です。当時，みんながそうしていたものなのですが，両親は結婚式の前に婚約していました。つまり，婚約して半年後に結婚したというわけです。婚約するということが普通だったのです。私の両親がいつ頃に知り合ったのかは知りません。父は，昔は木工労働者連盟 *Holzarbeiter verband* に入っていましたが，いつ加盟したのかは知りません。しかし，ブラウンシュヴァイクに来てからです。グロース・デンクテでは，彼は見習い徒弟だったので，そんなことは出来ませんでした。彼は他の連盟に移ることもな

しに，ずっと木工労働者連盟にい続けました。しかし，もちろん，解散させられましたが。父は，合唱協会やスポーツ協会，体操協会等のいずれにも属していませんでしたが，古くからの救急隊員として，彼は死ぬまで40年間も赤十字で奉仕しました。彼は1945年2月1日に亡くなりました。まだ戦争中でした。2月2日が私の誕生日なので，忘れることができません。ブラウンシュヴァイクで亡くなったのです。死因は大腸癌でした。

私の母は92歳まで生きましたが，頭はしっかりしていました。父は1868年に誕生し，母は1869年に誕生しています。両親はちょうど1歳ちがいでした。母は，ブラウンシュヴァイクで11月21日に生まれました。母は，ルター派の新教に属し，教会から脱退することなく，死ぬまでしっかりと教会にとどまり続けました。

母は，10年間，ブラウンシュヴァイクで家事手伝いをしていました。1883年に14歳で国民学校を終えてから結婚するまでの10年間です。それ以後，仕事はしていません。1893年に両親は結婚しています。母は，結婚後は，ちょっとした掃除婦などの仕事もしていません。子供が生まれましたから。私は両親の4人の子供の末っ子ですが，4人の子供がいては，家事仕事がたくさんあります。母親が子供の首に鍵をゆわえたひもを掛けて，出かけるなどということは，できなかったのです。そういうことは，私たちは知りませんでした。この頃は，「鍵っ子」という言葉があります。鍵を首に掛けています。車を買うために，母親が働かなくてはならないからです。そういうことは，当時の私たちにはありませんでした。この事だけを見れば，当時の方が子供にとっては良かったです。今は，多くの女性が働いていますが，彼女たちは働かなければならないというわけではないのに，贅沢したいし，車の費用やお金などもほしいからです。

母の雇い主は，マグニ教会 *Magni-Kirche* のレルヒェ *Lerche* 牧師です。彼は有名な人物でした。母は，彼の家で6年間，家事手伝いをしたのです。6年間です。この家が最後の雇い主でしたから，1887年からレルヒェ牧師宅で働いていたことになります。母が語ったところによれば，名前は覚えていま

せんが，アードルフ通り *Adolfstraße* に住んでいた，軍隊のお偉いさんの家でも働いていました。奥さんはロシアの伯爵夫人でした。その他の仕事口についてはわかりませんが，最後の 6 年間の牧師の家のことは，母がよく語ってくれたものです。その牧師には娘が 2 人いました。母は，料理女として働いていましたが，かなり長い期間，同じ家で働いていたことになります。しかも，結婚が仕事を辞める理由でした。母は，失業していたことはありません。

母は，父と結婚する前に他の男と結婚していたこともないし，私生児を産んだこともありません。母は， 6 人の子供を産みましたが， 2 人は早くに亡くなりました。ナチ時代には，子供を 6 人産むと，母親勲章を与えられたものです。母は 6 人の子供を産んだのです。しかし， 2 人は早くに亡くなってしまいました。だから，私はこの 2 人のことを知りません。母は，1893 年に結婚し，94 年に姉が生まれましたが，彼女も今はもう亡くなっています。この姉の後に，早くに亡くなった 2 人が生まれたのです。だから，私は彼らのことを知る機会がなかったのです。96 年に兄が，そして 1901 年に下の兄が生まれました。この下の兄はまだ生きています。その他に，母は 2 回，流産しています。いつ，母が流産したのかは，はっきりとは知りませんが，1898 年から 1901 年の間だったと思います。1901 年に下の兄が，そして 1903 年に私が生まれました。私の母は私生児ではありません。

母は，労働組合などに入ってはいませんでした。当時，そういったものはなかったのです。政党にも，ほかの何らかの協会にも入ってはいませんでした。婦人協会などにも入っていませんでした。彼女は，1961 年にブラウンシュヴァイクで亡くなりましたが，92 歳になっていました。死因は老衰で，いろいろな病気が一度に出たのです。父は先に亡くなっていました。

私は両親のどちらとも同じように，文句のつけようがないほどに素晴らしく理解しあっていました。そうあるべき理想的な親子関係でした。私たちの親子関係を表現するとしたら，父は，自分の義務を果たしたということです。つまり，しかるべく労働したということです。父は酒飲みではありませんでした。つまり大酒飲みではなく，タバコもやりませんでした。彼は，自分の

子供たちにきちんと食べさせ，養いました。多くの家で，父親が稼いだ金を酒に使い果たしたりしましたが，そういったことは，私たちの家庭では起こりませんでした。だから，両親の仲も，素晴らしく良かったのです。

妻の父親は，日雇いの農業労働者でした。あちこちで日雇い仕事をして，自分自身もいくらかの土地を持っていたようです。彼は戦争（：第一次世界大戦）で亡くなりました。妻は，戦争で父親を失い，母親とたった二人きりで残されたのです。彼女たちは，土地を捨てて，ポーゼン州 *Provinz Posen* を脱出し，ブラウンシュヴァイクへやって来ました。今日とはちがって，当時は，生きようと思ったら，働かなければならなかったのです。

妻の母親は主婦でした。しかし，ブラウンシュヴァイクへやって来てからは，ある庭師のところで働きました。彼女も生きなければなりませんでしたからね。造園業者に雇われていたのです。つまり造園労働者として働いていました。妻は結婚するまでは母親と一緒に，今はユリウス通り *Juliusstraße* ですが，当時のウィルヘルム・ブラッケ通り *Wilhelm-Bracke Straße* に暮らしていました。この通りは，何度か名前が変わりました。今のユリウス通り 17 番でした。

2．兄姉たちについて

私の両親は，3 人の男の子と女の子を 1 人生み，育てあげました。その内，今では 2 人が亡くなっています。男の子のうち，長兄が亡くなり，私のすぐ上の兄はまだ生きています。そして，私です。それに早くに亡くなった，私が知らない 2 人の子供もいました。私が知っているのは，その子たちの名前がリヒャルト *Richard* とフリーダ *Frieda* だったということだけです。

姉が一番年上で，1894 年に誕生しています。姉はアンナ *Anna* という名前で，1894 年 6 月 6 日に誕生し，1973 年に亡くなりましたが，その月日も，死

因もわかりません。

長兄はアルベルト *Albert* という名前で，1896 年 1 月 26 日にブラウンシュヴァイクで誕生しました。アルベルトは 1971 年に亡くなりました。脚を切断した後，１年の間に数度，卒中の発作を起こして，亡くなったのです。卒中が死因ですが，その前に脚を切断しています。いわゆる喫煙者の脚だったのです。

２番目の男の子が，早くに亡くなったリヒャルトという男の子で，もうひとりのフリーダという女の子も，ブラウンシュヴァイクで生まれていますが，彼らがいつ生まれたのかは，はっきりとは知りません。彼らは，アルベルトが生まれた 1896 年から，下の兄のオットー*Otto* が誕生した 1901 年までの 5 年の間に生まれています。両親が語ったところによると，リヒャルトの死因は破傷風でした。創傷性破傷風です。彼は 1 歳だったそうですが，正確にいつ亡くなったのかは知りません。私は，フリーダの事はまったく知りません。フリーダが，小さい子供の時に亡くなってしまったということだけは知っていますが，死因もわかりません。

1901 年 9 月 28 日にオットーが生まれました。オットーはまだ生きています。私の兄姉でまだ生きているのは，オットーだけです。

私の兄姉たちは，みな，結婚しました。早くに亡くなった 2 人以外ということですが。彼らは，まだ乳児でしたから。長兄のアルベルトが結婚したのは，1923 年です。姉は 21 年に結婚しました。オットーが 29 年で私が 31 年に結婚したのです。どの兄姉も離婚はしていません。どの兄も姉も私生児を生んではいません。

私たち兄姉はみな，ブラウンシュヴァイクで仕事をしました。みな，徒弟修行の後，すぐにブラウンシュヴァイクで働き始めたのです。ずっと働き続けていました。私は，51 年間働き続け，その間，１年間だけ失業手当を受けていたことがあります。

姉のアンナは，ブラウンシュヴァイクでアイロン掛けの職人でした。彼女は，結婚してすぐに男の子を生んだので，その後，仕事はしませんでした。アンナの夫は，ヴィンケルマン *Winkelmann* のピアノ造り職人でした。昔はヴィンケルマンという名前でした。ヒルデスハイマー通り *Hildesheimer Straße* のヴィンケルマンです。

アルベルトの職業は機械組立工で，ブラウンシュヴァイクで働きました。みな，ブラウンシュヴァイクで働いていました。

アルベルトの妻は，銀行で速記者兼タイピストとして 40 年間にわたり，結婚後も働いていました。

オットーの職業は工具製作工です。工具製作工というのは，例えば，ブリキ製品工場用の型押し（抜き）機のような装置を作り，缶詰のふたの型を抜くわけです。旋盤工の仕事というのは，すべて丸いのです。回転する機械が丸いのです。例えば，缶詰の切り口は又，旋盤でなめらかにされます。旋盤工は，機械無しでは何もできません。それに，旋盤という機械です。機械組立工は，万力ですべての部品を組み立てます。機械組立工は万力で仕事をし，旋盤工は旋盤機で仕事をします。

オットーの妻は，裁縫師でした。親方ではなくて，以前はヴィッティンク *Witting* で働く普通の裁縫師でした。

兄姉みながブラウンシュヴァイクに残っていましたが，私は，兄弟の中では，亡くなったアルベルトと一番良く理解し合っていました。アルベルトは 1896 年生まれで，私は 1903 年生まれです。7 歳の年の差がありました。私が 10 歳の少年の時，彼はもう徒弟修行を終えていました。彼は，私に「ここにおいで，坊主」と言っては，いろいろなことを教えてくれました。それに，今も覚えていますが，堅信礼を受けた時のことです。アルベルトは戦線にいたのですが，父に「ヴィリ坊やの堅信礼のためにきちんとした時計を買ってあげてください。」と手紙を書いてくれたのです。昔は懐中時計が流行っていたものです。兄のオットーは懐中時計をもらいませんでした。私は，この懐

中時計を今も持っています。まだ動くのですよ。まだまだ動くのです。私たちは，みな，お互いに，兄姉同士よく理解し合っていました。私がまだ学校の生徒だった頃，アルベルトは，いつも小銭をくれました。彼は，もうお金を稼ぐ男になっていたのです。

3．両親の家の住居

私はエルンスト・アンメ通り *Ernst-Amme-Straße* 30 番の両親の家で生まれました。両親は，この家に 60 年間住んでいました。両親は，一度として引っ越しをせず，ここに腰を落ち着けていたのです。だから，私が子供の時に住んだのも，この住居だけです。

このエルンスト・アンメ通りの両親の住居は，3 部屋の住居で，55 平方メートルの大きさでした。この住居は他の住居から独立した，廊下のある住居でした。地下室と屋根裏部屋もありました。台所もありました。トイレは，当時としては，それが一般的だったのですが，半階下の階段室にありました。バス・ルームはありませんでした。台所で洗面台の前に椅子を置き，体を洗ったものです。もちろん，お湯で洗いました。コンロでお湯を沸かしたのです。当時，すでにガスは住居に引かれていたので，ずっとガスはありました。

いやー，想像もしてみて下さい。風が家の中に入ってくるのに，私たちは台所で体を洗ったのです。バス・タブなどは，まだありませんでした。だから洗面台の前に立って，体を洗ったのです。

このエルンスト・アンメ通りの住居には納戸はありませんでした。しかし，地下室と屋根裏部屋はありました。この住居は，8 家族用に建てられた建物の中にありました。この家は，まだ今もありますよ。その建物は，1890 年に新しく建てられた家でした。それで 1893 年に私の両親が結婚して，そこに入居したというわけです。父から聞いたのですが，1893 年の結婚当時の家賃は，1 年間で 60 ターラーだったそうです。60 ターラーです。まだターラーの時代だったのです。

それから 60 年間にわたって住んでいたのです。その家は，4 階建てで，私たちは 4 階に住んでいました。この家はカール・コッホ *Karl Koch* という家主のもので，彼も 60 年間にわたり，ここに住んでいました。住宅組合のものではなく，民間のものだったのです。家主とは，親戚でもないし，父の知り合いだったというわけでもありません。1935 年の家賃は 25 マルクでした。

私の両親には 4 人の子供がいて，私は末っ子でした。だから，エルンスト・アンメ通りの住居には 6 人で住んでいました。私たちはみな，ここで生まれました。私の家族の他には，祖父母も一緒には住んでいませんでしたし，又貸しもしていませんでした。両親と子供たちだけで住んでいたのです。私は末っ子だったので，他の兄姉たちはみな，家を出ていたために，部屋の余裕があったから，結婚した時も，この住居に住むことができました。

私と妻は，1931 年に結婚し，この住居で，私たちは 16 平方メーターの寝室を与えられました。5 年後の 36 年に，私は自分自身の住居を構えたのです。この小さな部屋は，私たちのベッドをどうにか置けるくらいの広さでした。他の物は，置けませんでした。当時は，景気の悪い時代でしたが，私たちはお金があったので，家具屋のハンゼマン *Hansemann* で，家具調度を買いととのえて，そこの倉庫に預かってもらっていました。ハンゼマンは，ブラウンシュヴァイクで一番大きな家具屋でした。当時，結婚用のローンなどはありませんでしたから，これらの家具は，すべて私たちが働いて得た金を貯めて買ったものでした。エルンスト・アンメ通りのこの住居で両親と妻と一緒に暮らし，そこで子供も生まれました。兄姉たちは，もう彼ら自身の住居に住んでいたので，この住居に，両親，私と妻と息子の 5 人で住んでいたのです。

私たちは，息子が 5 歳の時に，自分たちの住居を手に入れたので，この住居を出ました。

4．近隣の様子

戦争中は，── 1914 年から 18 年の第一次大戦中にということですが ── テニスコートがジャガイモ畑になりました。市民公園 *Bürgerpark* の中のオランダ庭園 *Hollands-Garten* にはすぐに負傷者用のバラックが建てられました。居酒屋の『白い馬』‘*Weißen Roß*’ にも 2 面のテニスコートだった場所に，長く大きな負傷者用のバラックが建てられました。戦争が始まって 4 週間もたっていないのに，もう最初の負傷者がやって来たのです。すでに話したように，私の父は 40 年間，赤十字で救急隊員として奉仕活動をしていました。仕事の他に，民間で奉仕活動をしていたのです。戦争中は，どの会社も，どこに赤十字の隊員がいるか知っていたので，何かあると，すぐに連絡がきました。だから，負傷者を乗せた汽車が到着すると，みんなで駅に行って，彼らを担いできたものです。この戦争中に，大きな病院，つまり空軍病院がエルンスト・シャイデマン通り *Ernst-Scheidemann-Straße* に建てられました。どこのホールも軍事病院になりました。そして，どの軍事病院もバラックの他は，満員でした。それらのバラックには 60 台のベッドが入っていました。2 棟のバラックでもう 120 台のベッドです。それに加えて『白い馬』にはダンスホールなどがありました。私は男の子だから，何処にでもほっつき歩いていたものですが，ここの舞台の上にまでベッドが置かれているのを見ましたよ。ものすごく多くの負傷者が出たものです。

戦争が始まり，最初の頃のことですが，リエージュ*Lütiich*（：ベルギー東部の工業都市）陥落で学校が休みになったことを覚えています。ベルギーの最強の要塞であるリエージュが陥落したのです。子供たちの学校が休みになりましたが，母親たちは家で「どれだけ多くの人々がまた命を落とさなければならないのだろう」と言って泣いていました。おかしな事に，第一次大戦中は，通りで若い男を見ることはありませんでした。健脚の者はみな，戦争に引っ張られました。今回の戦争（第二次世界大戦）中は，見知らぬ男たちがたくさん，そこら辺を歩き回っていたものです。

5．学校生活

私は 1908 年から 1917 年までディースターヴェーク *Diesterweg* の国民学校に通いました。学校に通ったのはここだけですが，その後，職業上，いわゆる研修学校に行きました。職業学校です。

私は，近所の子供たちと同じ学校へ通いました。私は，いつも成績の良い生徒でした。クラスで 1 番， 2 番， 3 番を占めていたのです。当時はまだ中等学校はありませんでした。私が 12 歳の時にはじめて，ここのアウグスト広場 *August-Platz* に中等学校ができました。最初の中等学校でした。そして各国民学校から数人ずつ，学年的に合う優等生が選ばれて，この中等学校の 1 年生のクラスが編成されたのです。私は 1 学年分，上だったので，この中等学校に行くチャンスがありませんでした。そうでなければ，私もこの中等学校に行っていたことでしょう。国民学校でも授業料は払っていました。まだ覚えていますが， 3 カ月に一度， 1 ドイツ帝国マルクでした。

学校ではよく殴られました。尻には青痣や緑の痣がついたものです。学校では，とにかくしばしば殴られたものです。私はクラスで一番の生徒でした。しかし， 1 つか 2 つの答えを間違えると，先生が「K，何だ，お前？　出て行け！」と言って，その後，クラスの大半の生徒を締め上げました。私のためにです。学校では， 8 日毎にぶちのめされていました。それで，私たちの体中にいろいろな色の痣がついてしまいました。そして，私の場合は，母が私の尻を見てしまいました。オットーが告げ口をしたのです。オットーが，血が出ているみみず腫れのことを母に告げ口したのです。母はいつもたいへんケンカっ早かったので，先生をやっつけるために，学校へ来ました。「明日の朝早くに学校へ行くからね。」と言ったので，私は翌朝，もう母が学校に来ていることを知っていました。授業時間になったのに，先生がぜんぜん教室に来ません。30 分たったけれど，先生はまだ来ません。私は母が彼をなじっていることを知っていました。その後に彼が教室に入って来た時には，もう終わりのベルが鳴る少し前でした。ただ先生の顔は真っ青でした。後から母

は，どんな風に言ったのかを私に話してくれました。彼女は「もし，私が子供を医者に連れて行ったら，あなたの身の上に何が起こるか知っていますか？」と彼に言いました。先生は，すぐに「すみません，すみません」「ええ，私は，私は……」などと言いましたが，「まあねえ，あなたがそんなに興奮して，それを抑える能力がないなら，あなたは教育者ではありません。ということは，教師でもありません。また同じ事が起こるのでしょうね。」などと母は言ったのです。先生は，すぐに，すみません，すみませんと謝りました。しかし，彼は後に私の一番の友人になりました。それは，私がもう結婚してからのことです。私たちはまだオスト通り *Oststraße* に庭を持っていました。私は，その時，もう 30 歳になっていたのですが，その頃，先生たちは，いつも週日はパーヴェルシェ・ホルツ *Pawelsche Holz* にコーヒーを飲みに通っていました。そうすると，ある時，彼が通りかかって，私を見て，「こんにちは，K君。元気ですか？」と声をかけてきたのです。それ以来，私たちは一番の友人になったのです。彼は，その後，学校監督官になりました。当時は，そういう職もあったのです。

彼は，他の生徒たちに対しても同じように振る舞っていましたが，後に彼は静かになりました。彼は，もう私につかみかかったりはしませんでした。一番の生徒としての私は，答を 2 つ間違ってはいけなかったのです。今となっては，彼から私たちは良く学んだのだ，と思っています。学校の授業に宗教があったのですが，宗教の時間には，30 分たつと，「ああ，本を閉じよう。算数をしよう」という風でした。

6．子供時代の労働と遊び

私は長期休暇の時には，テニスをする人たちのために，ボールを拾い集めて 50 ペニヒを稼いだものです。時々，そんな小遣い稼ぎをしました。学校の遠足の時に，　素敵なリュックサックを持たなければなりません。そこでリュックサックを買う金を自分で稼いだというわけです。私は稼いだ金を貯

めておきました。つまり,「買い食いで無駄使いしないよ。」と自分に言い聞かせて,学校の遠足用のリュックサックを自分で買うことができたわけです。自分で稼いで買ったということに,鼻が高かったのです。ちょっとした買い物のために小遣い稼ぎをしたというわけです。1914 年に戦争が始まり,そこでテニスをすることができなくなりました。私は 1903 年生まれですから,ボール・ボーイで小遣い稼ぎをしていたのは,私が 11 歳の時まででした。

私は今でも家でやっていますが,母の家事仕事を手伝いました。当たり前のことです。家にいる時には,すすんで手伝います。母親が食器を洗い,父が拭くのです。私が母の家事手伝いを始めたのは,12 歳の時でした。私たちは,家で食器も洗いました。12 歳の男の子でした。家事の手伝いはそれだけでした。主に家事をしていたのは母でした。いつも母でした。自由時間は,それほど多かったとは言えません。

昔は,学校から帰ると母がいて,彼女が作った食事をし,母が食器を洗います。すると,「さあ,あんたたち落ち着いて宿題をしなさい。」と母が言います。すると,それから 2 時間も座り続けるのです。毎日です。そうですとも,宿題をしたのです。私たちはそんなに多くは遊べませんでした。なにしろ戦争中でしたから。

14 年に戦争が始まって,まず石油がなくなりました。その他にもいろいろな物が欠乏しました。牛乳屋で今日,脂肪抜き牛乳があるというと,1リッターの牛乳を手に入れるために,深鍋を手に,列に並びました。そんな風にして,私たちは戦争の終わりの頃,1917 年には,いつも列に並んでいたものです。マーガリンがあると,人々が押しかけて,警察がでたものです。第一次大戦では,そういう風でした。

とにかく戦争中の年月は,いつも長い列に並んでいました。1ポンドの骨,1リッターのスープなどのためでした。1917 年に徒弟修行に出ましたが,そうすると一日中,仕事場にいたわけです。だから,今度は母が列に並びました。1ポンドのチーズや凝乳を手に入れるためにです。私たちは本当に腹を空かせていました。こういうことのために私たちには遊ぶ時間がありません

でした。そんな風にして私たちは自由時間を過ごしていたのです。

1916 年のことをまだ覚えています。この年のことを蕪の年と言っているのですが，私たち子供は，カラスのように蕪を盗みました。蕪を収穫すると，穴に埋めて，春になると穴を掘り返し，その中に入れてあった蕪がまた馬車に積まれます。私たち子供は，「いったい何だろう？」とそばによって行きます。作業員の中には，兵隊たちもまじっていて，その作業をしていました。彼らは，おもしろがってその作業をしていました。誤った振りをして，蕪を馬車を超えて，放り投げ，馬車の脇の道路に落としたのです。そこで，すかさず私たちがこの蕪を持ってきました。

1917 年に私は徒弟修行に入りました。一日中，仕事場にいました。そして一週間に 4 回，夕方から職業学校に行きました。工場で 8 時間働いた後，家に帰って，着替えて人間らしく身じまいをします。5 時から 7 時まで学校の椅子に座りました。7 時に学校が終わり，それから 7 時半には家に着いていました。1917 年，18 年の食糧難の時代のことです。母が出してくれるものは，いわば「かき混ぜる」ものでした。それが何を意味するかというと，水のようなスープをスプーンでかき回してすすっていたのです。私たちの少年時代は，そんなものでした。私たちは，少なくとも私は，腹を空かせていました。私たちは町に住んでいたのでひもじさということを知りました。田舎に親戚がいれば，食糧が手に入りましたが，そうでなければ，空腹に悩んだのです。私は飢餓とはどんなものかということを学びました。

最近，ガーレ夫人 *Frau Gahre* に語ったばかりなのですが，1915 年のことです。私の長兄が兵隊で，まだ駐屯部隊での教育期間中でした。「それは 5 月のブラウンシュヴァイクでのことだった。そこのハーゲンマルクト（市場）*Hagenmarkt* で殴り合いの大ゲンカがあったのさ」という歌がありました。まだ兵役に付いていない若者たちが道を歩いていきました。群れになっていたのです。そこで大がかりな殴り合いになりました。私はまだ覚えていますが，ブラウンシュヴァイクには軽騎兵隊員の兵舎がありました。私たちが 12 歳の

子供の頃は，いつもそこへ行っていたものですが，「ああ，ここで何が起こっているのだろう？」という好奇心からです。そこで兵隊たちが歩道の上を馬に乗って，人々をあちこちに追い散らしました。私の兄はちょうど，教育期間中でした。兵隊たちは，夜中，まだハーゲンマルクトに機関銃を据え付けて，待機していました。銃撃戦はありませんでした。それは，1915 年のことでした。当時，国は青年たちに強制貯金をさせようとしていたのです。この強制貯金というのは，戦争債券のようなもので，お金をすべて国の金庫に入れるのです。それで，「それは 5 月のブラウンシュヴァイクでのことだった。そこのハーゲンマルクトで殴り合いの大ゲンカがあったのさ」という歌ができたのです。警察は来なかったのですが，軍隊が投入されました。歩兵と軽騎兵までが来たのです。馬で歩道を進んで行くのですが，パカパカという音の響きがとても良かったものです。「ああ，ここで何かが起こったのだ！」と思ったものです。

また 1918 年のメルカー部隊 *Maerckertruppen* です。このとき，メルカー部隊には臨時の志願兵がいました。ブラウンシュヴァイクは，いつだって赤かったのです。ブラウンシュヴァイクでは，いつも何か政治的な騒ぎが起こっていたのです。ナチ時代，ブラウンシュヴァイクでは政治活動が盛んでした。そして KPD の時代も，盛んでした。ここでは，いつも何かが起こっていたのです。

1918 年のことですが，私がヴェンデン通り *Wendenstraße* を歩いていた時のことです。ハーゲンマルクトに建っているカタリーネン教会 *Katharinenkirche* の教会の塔の上で，メルカー部隊の兵隊たちが機関銃を撃っていました。私が思うに，テッテッテッという音だけの，空砲だったのです。そこでヴェンデン通りを走りました。その通りを歩いていた私たちは，みな通りの家々に逃げ込みました。この部隊の話は，1918 年のことです。彼らは教会の塔の上にいました。バンバンバンバン。ええ，ええ，そうですとも，もうそこでは何かが起こっていたのですよ。メルカー部隊は革命の後，ブラウンシュヴァイクを占領しました。それは，つまり，一種の人民防衛隊のようなもの

が設立されたのです。当時，私はまだ徒弟でした。そして，武器と腕章が渡されました。日曜日毎に射撃がありました。メルカー部隊がどんな風にブラウンシュヴァイクにやって来たか，私はいまだに彼らが駅に到着した時のことを覚えていますよ。古い方の駅です。駅に彼らが来て，フランクフルター通り *Frankfurter Straße* を下ってきたのです。

子供の頃の遊び相手は，ほとんどが同じ家に住んでいた子供たちや近所の子供たちで，いつも一緒にいたものです。

昔は通りで遊びました。ラウンダーズ（野球に似たゲーム）などをしたものです。昔は，ラウンダーズを通りですることができたのです。私たちが子供の頃は，車などいつ来るっていうのでしょう。1912 年のことです。私たちの住んでいたロス通り *Roßstraße* にはウンガー＆ゾーン *Unger & Sohn* 工場がありました。ブリキ製品の工場です。今はもうありませんが。今は，そこはブラウン社 *Braun* になっています。自動車がドアの前に駐車していると，私たち子供はその回りに集まって，ああでもない，こうでもないと言い合って，車をじっと見ていたものです。車の前にランプが 3 個あって，これはアセチレン・ランプでした。きれいなぴかぴかの真鍮の箱の中にアセチレンを入れる仕組みになっていました。私たち子供は自動車に見とれていました。1912 年のことでした。自動車なんて，そんなになかったから，通りで遊ぶことができたのですよ。馬車がやって来るくらいで，来ても，パン屋が雑貨屋にパンを運んできたり，朝，牛乳屋の馬車が来る時以外は，通りは空いていました。工場用の運搬車等は通りませんでした。MIAG 社は，鉄道線路を引いていました。

私が徒弟修行していた時は，8 時間働きました。4 時に終業でした。私は両親の家に住んでいましたが，MIAG 社は，ヒルデスハイマー通り *Hildesheimer-Straße* にありましたから，距離的に都合の良い場所に住んでいました。4 時に家にもどり，人間らしく身づくろいしました。昔は，徒弟は

ネクタイをしめて行き，急いで，5時には職業学校に着いていました。私たちは図面の授業をマッシュ通り *Maschstraße* で，そして他の授業をライヒス通り *Reichsstraße* で受けました。授業は5時から7時までありました。7時に授業は終わったのです。7時半には，もう家に着いていました。冬には，もう暗くなっていました。それで一日は終わりです。学校は一週間に4回ありました。子供たちが長期休暇になると，私たちの職業学校も長期休暇になったので，嬉しかったものです。週末には，ライオンの像のある城の向かい側のギルドハウスに行きました。私は，徒弟として，日曜日毎に，いつもギルドハウスの徒弟寮に行きました。しかし，この寮は，どちらかというと，手工業の親方のもとで修行している徒弟用であって，私たちは本来，このグループに属していないいのだと自分に言い聞かせたものです。

そのギルドハウスで，私たちは日曜日の3時から夕方8時まで，ホールを使って遊ぶことができました。私はそこへ喜んで行って，2年間ほど通ったのですが，通って1年目くらいからのことですが，他の若者たちが来て，「おい，我々はここに属していないんだ。我々は SPD 青年部に属すべきなのだ。SPD 青年部もクラブハウスを持っているし，部屋もあるよ」と言いはじめたのです。当時はそんな風にして時間をつぶしていました。そして，修業時代が終わり，18歳になっていました。そうすると，お尻がむずむずしてきました。ダンスのレッスンです。ダンスのレッスンですよ。素晴らしい時間でした。ダンスのレッスンが楽しかったのです。ダンスを楽しみました。そうしてダンスが私の人生に影響を与えるようになりました。つまり，少女と知り合い，大人の女性と知り合い，そして結婚して，人生を歩んできたのです。

7．親子関係

両親と話さなければならないほどの大きな個人的な問題などはありませんでした。私たち子供の間で大きな議論をしたことはあります。私は自分をほめるわけではありませんが，私たちは親に服従しました。親に従っていまし

た。私たちの家では，よその家の母親が言うように，「まあ待っていなさい。今晩，お父さんが帰ってきたら，私がお父さんに話してみるから。そうしたら，何とかなるでしょうよ」などと言ってくれることはありませんでした。子供たちの誰かが盗み食いをした時などは，見つかったその場ですぐに，母にお仕置きを受けました。でもだからといって，晩に父に告げ口をするというわけでもありませんでした。私も自分の息子は，そんな風に育てました。私は妻に言ったものですよ。「彼が何か食べてしまったら，その場で彼に，こっちへおいでと言って，お仕置きするのだ」「もうパパが帰ってくるよ」と息子に言って，私に「見てよ，彼があした，こうした」などと言わないようにとね。お仕置きを受けるのは当然です。実際，それがしつけだし，そういう教育は母親の仕事ですからね。家には鞭がありました。長い棒に皮が釘で打ち付けられていて，その皮が細く裂かれているものです。その鞭がいつも壁に掛けられていました。最後に父にその鞭で打たれたのは，10 歳か 11 歳の時でした。その後は，もう鞭で打たれたことはありません。

私は末っ子なので，皆から少しは甘やかされていましたが，私たち 3 人の男の子たちは，そんなに殴られたことはありません。私たちがケンカなどをしたときは，父は，スリッパを投げてよこしました。それで何が起こるか分かるので，ケンカをやめました。彼は，ただスリッパを投げつけただけでした。父は，私たちが小さいときには，日曜日の朝に，森に連れて行ってくれたりしました。

両親の家では，お金に関することは話されませんでした。私は，結婚してから妻と「これは家賃の分だよ，これはあれ用，これは何々用。どんな風に家計のやりくりをしたかな？ 1 マルク繰り越し分が残っているかな？」などという風に話しました。息子とは，お金の話をしたことはありません。

8．結婚

私は，1931 年にエルナ・ファルク *Erna Falk* とブラウンシュヴァイクで結

婚しましたが，彼女は 1977 年 1 月に亡くなりました。死因は癌でしたが，この病名を口にしたくはありません。その後，私は再婚していません。

私と妻は，婚約後 1 年間たって，8 月 8 日に結婚しました。私は婚約するまで，4 年間，彼女と付き合っていました。時代が悪かったので，私は家具付きの部屋から始めることのできる人種には属していませんでした。しかし，私たちの意思は決まっていたし，4 年間も付き合っていたので，「婚約しよう」ということになり，1 年間の婚約期間の後に結婚したというわけです。私たちはどちらも一緒に，婚約しようという意思を固めたのであって，どちらか一方が強く主張したということではありませんでした。4 年間も付き合ったのですから，それが当然です。結婚の時もまったく同じでした。しかし，結婚前に同棲はしていません。私は他の女性と婚約していたということもありません。

若者としてダンスホールで知り合った多くの娘たちといちゃいちゃしたりはしました。何度かデートをし，日曜日に遊びに出かけたりしましたが，「ああ，この娘はそんな気はないのだ」とわかるものです。当時は，そんな風でした。私が妻と知り合ったのは，23 歳の時でした。妻と出会う前，女ともだちと付き合ったのは，20 歳から 21 歳，22 歳くらいまででした。そして，23 歳で私たちは知り合ったのです。私たちが結婚するまでには 5 年間かかりました。その間には，起こるべくして起こることは，すべてしました。当然のことでした。

エルナは，1904 年 8 月 28 日に西プロイセンのブロンベルク *Bromberg* で誕生しました。このブロンベルクは，その後，ポーランド領になりました。彼女は 17 歳でブロンベルクからブラウンシュヴァイクへ来たのです。

彼女は，当時の難民でした。1920 年と 21 年の西プロイセンからの難民です。普通は，西プロイセンとは呼びません。ポーゼン州のことです。彼女の家族は生きるためにこちらへ来たのです。彼女は働かねばなりませんでしたから，ドイツ・ブリキ製品工場 *Deutsches Blechwarenwerk* で労働者として働いていました。彼女は，そこではんだ付けしたり，鉄板を折ったり，鉄板の

裁断などもしていました。彼女は働いて，生きなければならなかったので，1931年までその仕事をしていましたが，息子が生まれたので，その後はずっと専業主婦でした。彼女は，仕事をやめるまでずっと，同じ会社で働き続けました。失業したこともありませんでした。

私たちは，結婚してから5年間，私の両親の家に暮らしていました。当時の住居状況は悪かったのです。まったく悲惨でした。私の両親は，私たちに一番大きな部屋を空けてくれました。5年間，私たちはエルンスト・アンメ通り30番の両親の家で暮らしたのです。そうですとも，エルンスト・アンメ通り30番です。5年間，ここで暮らし，それから自分たちの住居を持ったのです。つまり，私はブラウンシュヴァイク住宅組合の組合員なのです。しかし，昔は，順番がくるまでに10年間は組合員になっていなければなりませんでしたが，私は完全な3部屋の住居を持つことができました。

私には息子が1人います。名前はギュンター*Günter* です。彼は1933年12月11日にブラウンシュヴァイクで誕生しました。もちろん，まだ生きています。私には私生児はいません。息子は実業学校に通って，中学校卒業資格を取り，工業製品セールスマンになり，まだこの仕事をしています。

私は46年間，結婚生活をしていました。3年前に妻が亡くなり，1人でブラウンシュヴァイクに暮らしているのです。そして今，私には，いわば人生の伴侶がいます。独り者の2人の人間が一緒にいるということです。法的に結婚しないのは，年金があるからです。彼女は年金を捨てるべきではないからです。1400マルクを貰うか，貰わないかということです。私たちは年金で生活できるのです。私たち2人ともに年金を受けています。

9．性・避妊

私たちは，両親から性教育を受けたり，性に関することを話されたりしたことはありません。姉は，私よりずっと年上なのですが，彼女がいつも兄の

オットーに「いいかい，よくお聞き。世間にはわるい人がいるのだから，女の子は……」などと言っているのを聞いていたものです。私には誰も何も言いませんでした。私の兄は私よりも１歳半上です。女の子たちが彼の後をついて歩きました。しかし，姉は兄にいつも「注意しなさい。馬鹿なことはするんじゃないよ。」と言っていましたが，性について教えたりはしませんでした。誰も私には性について説明などしてくれませんでした。今は，学校の授業で性について教えられているようですが，私が 16 歳の時は，まだ未熟でした。その頃，おぼろげながら，何となく知っていましたが，女性のお腹が大きくなっていくのを見て，「なんてこった，どんな風にして子供が入っていって，出てくるのだろう」なんて事を思ったことがありますが，じきにそんな事は忘れてしまいました。特に興味を持ったということはありませんでした。あるエピソードがあります。まだ私が学校の生徒で，２年目の頃でしたから，８歳か９歳の時のことです。ある男の子が，学校に遅刻してきました。先生が怒って，「何で遅刻したのだ？」と言うと，「お母さんが子供を産んだので，来られなかったのです」。彼は母親の出産のせいで，学校の時間に間に合わなかったのです。それで，私たちは後で，「何，何，子供を産んだって？」。その頃，私はまだ子供がどこから出てくるのかを知りませんでした。「どんな風なんだい？」「ふうん，お前，知らないのか？　子供はお腹から出てくるのだ！」そんな話を信じてしまうほどに私たちは幼稚でした。子供がどこから産まれてくるかということは，後に子供同士の話の中で知りました。

当時，避妊の方法などについて，説明を受けたことはありません。ただ，誰かが「これを持っていけ，持っていけ」などと仲間うちで言い合っただけです。妻とは結婚するまで長い付き合いでしたが，幸運なことに，妊娠することはありませんでした。精液が中に残って，妊娠していたかもしれないのに，幸運でした。私たちは付き合いが長かったから，結婚前に性交渉はあったのです。私たちは若くて健康でしたからね。私の場合，避妊具については，誰かに教えられて知ったのです。私は，23 歳の時に，最初に性交渉を持った

女の子と知り合い，避妊具を使いました。

両親が避妊具を使ったかどうかは，昔は，そういうことは秘密にしていたので，わかりませんし，家で見たこともありません。私は父も母も裸でいるのを見たことがありません。母の裸も見たことがないのです。

10．職業生活

今は，職業学校と呼んでいますが，当時は研修学校と言っていました。私は，この学校に3年間通いました。修業期間は4年でした。私は，工作機械用旋盤工の職業教育を受けました。私たちは，4年間修行しなければならなかったのです。1917年から21年まで修行し，それからは，51年間ずっと，工作機械用旋盤工として働きました。工作機械用旋盤工の修行は，アンメ・ギーゼッケ＆コーネゲン社 *Amme, Giesecke & Konegen* でしました。今のMIAG社です。私は11年間，そこで働きました。その会社で修行し，そのまま雇われていたのです。修行期間も含めて1928年まで，11年間働いていたのです。その後，自分の意思で会社を辞めました。私は自分を変えることができました。私は，その後，ヴォルフェンビュッテル *Wolfenbüttel* の機械工場のM. エーアハルト社 *Ehrhardt* で，1928年から31年までの3年半，また工作機械旋盤工として働きました。そうしたら，31年に会社が倒産して，私は失業してしまいました。私は，51年間働いた後，1969年に年金生活に入りました。だから，今は年金生活に入って11年，家にいることになります。失業していたのは1931年から32年にかけての1年間で，その後1年間，フォイクトレンダー社 *Voigtländer* で働いた後，ビュッシング社 *Büssing* で34年間働いて，年齢制限のために，仕事をやめたというわけです。その他の時期は，いつも仕事に就いていたのです。私は結婚していましたから，失業中は，失業保険金を受けていました。失業保険金を受けていたのは，1年弱だけでした。持ち物の売り食いはしませんでした。

11．宗教・政党・労働組合・帰属意識

〈宗教〉

私は，1919年に堅信礼を受けています。私はまだ教会の牧師のところに行っていたので，青年式はしていません。私の兄姉たちもみな，堅信礼を受けに教会へ行きました。しかしみな，後に，結婚式は牧師無しでしています。私たちはみな，堅信礼のために教会へ行ったのですが，それで終わりです。２人の兄と姉１人です。誰も結婚式のために教会へは行っていません。しかし，みな，堅信礼を受けたのです。

結婚した時，私は，教会から脱退していました。妻はまだ新教の教会に属していましたが，教会での結婚式はしていません。教会がなくても結婚できますから。妻は，結婚して，教会から脱退しました。息子が生まれた時に，彼女は再び教会に戻りました。息子を洗礼させるために，両親のどちらかが教会に属していなければならなかったからです。つまり，その時，息子がいたのですが，その子が洗礼を受けなければならなかったのです。そのために，彼女は教会に戻ったのです。

私が教会に対して批判的なのは，教会税のせいです。それが税金に対して抵抗できる唯一の表現だったから，私たちは脱退したのです。私は1920年に教会を脱退しました。徒弟修行を終え，一人前の職人の賃金をもらうと，教会税を取りに来るのですから，その分を倹約できます。21年に，私は裁判所で長い列に並びました。つまり，教会からの脱退手続きのためにですよ。ヴォルフェンビュッテルの裁判所の廊下に並んだものです。脱退は，フリーメーソン運動とは何の関係もありませんでした。脱退の動機は，ただただ教会税を倹約するためでした。

〈政党〉

昔は，今のようには，家で政治について話す，ということがありませんで

した。自分がどこに属しているかということは知っていました。父はドイツ社民党 SPD の党員ではなかったのですが，SPD の機関誌は読んでいたのです。父は SPD の党員であったことはないのです。私も SPD の党員ではありませんでした。しかし，私はどの政党を選ぶべきか，私がどこに属しているかは知っています。SPD の機関誌は，昔は『フォルクスフロイント』でした。父は『フォルクスフロイント』‘*Volksfreund*’ だけを購読していました。私は，1920 年代に修行を終えた後も，両親の家に住んでいて，『フォルクスフロイント』を読んで，勉強したのです。

私は SPD の党員ではありませんし，党員ではありませんでしたが，SPD シンパです。だから，選挙で選ぶ政党は，決まっています。KPD や SPD に所属したことはありません。USPD や KPD などはとんでもないことです。昔，私たちが購読する新聞は，『フォルクスフロイント』でした。SPD の新聞です。その他には，労働者青年グループとか体操協会等にも属したことはありません。

〈労働組合〉

私は体操協会にも教会関係の会にも芝居関係の協会にも入っていませんでした。労働組合にだけ属していました。労働組合は，職業についている以上は必要でしたからね。金属産別工業労働組合 *IG-Metall* に属していました。この労働組合は，当時は，「ドイツ金属労働者連盟」‘*Deutscher-Metallarbeiter-Verband*’ という名称でしたが，1921 年に修行を終えたわけですから，21 年から今日まで属しているというわけです。50 年以上になりますが，所属 50 年目には 50 年を記念して祝ってもらいました。私は，ビュッシング社で職場委員だったことがあります。ナチスの支配が終わった，1945 年以降の数年間，職場委員を務めました。しかし，経営協議会の従業員代表になったことはありません。労働組合に入った理由は，私は開けた人間として労働組合に組織されるべきだと考えたのです。つまり，企業家の紳士たちが，工業連盟や経営者連盟に入っているように，大衆も一丸とならなければいけませんから。

全員一致して行動すれば力になりますが，ひとりぼっちでは何もできません。そういう理由から労働組合に入ったのです。それに，昔は，修行を終えると，同僚がやって来て，「どうだい，組合に入るだろう？」「はい，組合員になります」という具合にして労働組合に入ったものなのです。労働組合に加入しようという私の考えに影響を与えたのは，両親ではなく，職場全体の仕事の仕方です。つまり，仕事仲間です。男の同僚です。同僚同士の付き合いです。労働組合の公的な募集とか，労働組合の役員によって誘われたということではありません。

私の妻は労働組合に組織されていませんでしたし，他のクラブ等にも入っていませんでした。

〈帰属意識〉

当時，私が属していたのは労働者階級であり，SPD でした。しかし，私たちが学校に行くと，みんな同じ国民学校の生徒でしたが，そこで，私たち兄弟は，他の子供たちよりも良い身なりをしている，と私は思いました。他の子供たちは木のサンダルを履いて学校に行きました。私たちは木のサンダルは知りませんでした。それで私たちは他の子供に対して，僕はお前よりも良いのだと思ったものです。

正直に言うと，私は，政治に関しては，あまり良くわかっていませんでした。

12．祝い事・余暇

〈祝い事〉

祝い事としては，後に両親の銀婚式や金婚式を祝ったのですが，彼らは金婚式を体験できたのですよ。誕生日を祝うようになったのは，後になってからです。私は，結婚してから子供と一緒に誕生日を祝いましたが，若い頃，私たち自身の誕生日などは祝ってもらいませんでした。誕生日は，両親の家

では大きな意味をもっていませんでした。カーニバルは，昔，まだ今のようなカーニバルではありませんでした。

学校の生徒の頃のことですが，メーデーの隊列を組むことが禁止されたことを覚えています。1914 年以前のことです。SPD が赤い旗を掲げて歩きだしたら，警察が来て，解散させられました。私たちは学校へ行かなければなりませんでした。私が知っているかぎり，メーデーは，まだ祝日ではありませんでした。労働者は仕事には出かけませんでした。労働者は，いわば暴力的にメーデーの祝いをしたのです。そして，隊列を組んで繰り出しました。そこへ警察が来たのです。昔は，警官は頂にとがった金具のついた黒い革製のヘルメットをかぶっていました。そして，メーデーのような時には，ズボンのベルトを付け替えて，ピストルのホルダーを付けたのです。メーデーの時だけでした。そうでない時には，昔は，警官は公共の場でピストルを携帯してはいませんでした。メーデーのために，特別に武装したのです。メーデーでは，しばしば暴力沙汰がありました。

その後は，1918 年に革命があり，メーデーが，本格的に祝われるようになったのです。

1914 年のメーデーの時は，私たちは学校へ行かなければなりませんでしたから，メーデーに参加してはいません。父も参加していませんでした。私が参加したのは，後の，ナチの時代でした。参加したいかどうかではなく，私たちは参加しなければならなかったのです。

クリスマスの祝いは，私の家ではいつも，とても盛大に祝いました。復活祭もです。今はチョコレートがありますが……学校の生徒は復活祭に甘い卵ももらいました。昔は，主婦は聖霊降臨祭の祝日やクリスマス，復活祭の祝日などには，ケーキを焼いたものです。パン屋は，一日中，ケーキを焼き続けて，売りました。主婦にとっては，そういう祝日にケーキを焼くなんてことはごく普通のことでした。大晦日，私たち若い者は，家から出かけて大晦日を祝いました。両親は，家でゆっくりと過ごしていました。まだラジオもテレビもありませんでした。両親にとって大晦日とは何だったのでしょう。

若者はどんちゃん騒ぎをし，両親は静かに家にいるという風でした。

〈余暇〉

私の父には，6人の子供がいました。2人はもう亡くなっていたので，実際には4人でした。夏の時期などは，父は仕事が終わると，Kさん，Kさんと呼ばれて，いつも何かの仕事をしていました。誰かが家を持っていて，床板を張らなければならないと，Kさんがいる，Kさんならできるから，Kさんに頼もう，ということになるわけです。だから，夕方，他の人が庭をもっていて，「庭の木を片付けたいのだけれど」と言うと，誰が片付けたかというとKさんです。つまり，父はいつも働いていたということです。彼は，いつもお金を必要としていたから，工場の仕事が終わった後は，今でいう，もぐりの仕事もしていたわけです。私たちの住居と同じ階に郡の苗畑の庭師長が住んでいました。いつも木を切るために，小さなのこぎりを持って行っていました。苗畑で使用する全てののこぎりを私の父であるKさん以上に上手に研ぐことが出来る人はいませんでした。父はのこぎりを研がねばなりませんでしたが，たいてい，夕方にも研いでいました。私たち子供は，石油ランプを手に持って父の手元を照らしました。床の上は工場のようでした。作業台，万力などがあって，父がのこぎりを研いでいる間，私たちが灯油入れの缶をもって，灯油ランプを灯していたものです。「さあ，これをあちらへ持っていけ」と父が言うと，私たちが「いくらだい？」と聞きます。「15ペニヒと言っておけ」という具合に父が答えます。このようにして，父は働いたものです。

母は，家事をしなければなりませんでした。3人の息子に，MIAG社で働く父と，その他に父はもぐりの仕事もしていたのですから，大変でした。いつも目の回りが黒くなっているくらい，母は，本当にいつも何か仕事をしていました。私たち家族を知っている人たちは「Kの息子たちは，いつも背広を着ている。そんな家の奥さんはいつも働いていなければならないから，家から出られないのさ」と言ったものです。当時は一般的だったのですが，母は，家事で手一杯だったので，主婦として自分のために使う時間がなかったので

す。しかし，その後，晩年になってから，父は，MIAG 社の小さな庭をもらいました。MIAG 社は土地を持っていたのです。小さな庭を持っている人は，小さな小屋しか建てませんでした。その庭の大きさは，10 分の 1 モルゲン（モルゲン：ドイツの耕地面積の単位）で，250 平方メーターでした。それぞれの区画の境界線を柵で区切っていました。そこで数ツェントナー（1 ツェントナー＝50 kg）のジャガイモを収穫できたら，喜んだものです。この庭は MIAG 社の裏側にありました。そこには大きな苗畑がありました。今では，この場所には，どこも家が建っています。今のザールブリュックナー通り *Saarbrückner Straße* です。そうですとも，そこに苗畑があったのです。

MIAG 社は，戦争中，苗畑の後ろに，飛行場をもっていました。というのも，戦争中，MIAG 社で飛行機が修理されていたからなのです。戦争当時の飛行機は，軽飛行機で外皮が張られたものでしたが，私たち子供はいつもその辺をうろついて見ていました。今のブロイツェマー通り *Broitzemer Straße* が飛行場でしたが，修理が終わると，その飛行場に飛行機が引き渡されました。そして，戦争が終わった後に，飛行場の一部が会社のものになり，会社はその土地を区画に分割したのですが，希望者は小さな土地ですが，それを貰ったのです。それで私たちもわずかな土地を貰ったというわけです。私の父は，この土地を，今回の戦争中も含めて 34 年間にわたり耕作しました。私の父が亡くなった時に，ある人が「あの土地は持っていろ。数ツェントナーのジャガイモを収穫できるのだからね」と私に言いました。私は，妻と一緒に 54 年までその土地でジャガイモを作りましたが，時がたつとともに，グズベリーの木が 15 本になり，他の果物の木もふえていました。しかし，収穫する時にトゲで指を刺したりして，大変になったのです。それで収穫しないと，果物は下に落ちてしまうだけです。だから私たちはもう庭仕事をしなくなりました。

昔は，日曜日になると，両親は私たちを連れて，市民公園 *Bürgerpark* の『パークハウス』‘*Parkhaus*’ に行ったものです。みんな爆撃されて無くなりま

した。古い方の駅の，駅前の公園に，大きくて素晴らしい庭園レストランがありました。日曜日には 2 人のミュージシャンが演奏していました。両親が私たちと出かけると，そこに座らせてくれて，10 ペニヒのマルツ・ビールを１杯注文してくれました。そして，「そんなにあわてて飲まないで。それで午後いっぱい，持たせるんだよ」などと言われたものです。両親はそんな風にしてくれました。こういう外出は夏だけのことでした。冬は，家にいました。冬などはいったい何処に行ったらいいというのでしょう。まあ，親戚の家を訪ねたりしました。

母には 4 人の兄姉がいたので，お互いの家を訪ね合っていました。そういった親戚の家にも子供たちがいました。そんな風にして日曜日や余暇を過ごしていたのです。

戦争が終わって，兵隊がまた戻ってきました。そうしたら，いわば狂ったダンスの時代が来ました。私たちは若かったのです。日曜日に私たち若者がダンスをしなかったとしたら，それは日曜日とは言えませんでした。いろいろなダンスホールがありました。素敵なホールがたくさんありましたが，みんな壊れました。『ダンネス・ホテル』‘*Dannes Hotel*’ は，今まだアウグスト学校 *Augustschule* が建っている場所にありました。みんな爆撃されてしまいました。それは大きなホテルでした。それから『ウィルヘルムスガルテン』‘*Wilhelmsgarten*’ や『ブリュニングス・ザールバオ』‘*Brünings Saalbau*’ などにも行きました。しかし，みんな無くなりました。ダンスホールだけでなく，昔の小さな居酒屋などもみな無くなりました。

その他にも『ホーフイェーガー』‘*Hofjäger*’ や『コンツェルトハス』‘*Konzert-haus*’ などもあったのに，みんな今はありません。『ホーフイェーガー』では，党の集会などもしたものです。ダンスには私たち若者同士で一緒に行きましたが，それは友達や同僚などでした。「ダンスに行くぜ」と誘い合って出かけて，すぐに女の子と知り合います。

そしてその後に，私は妻と知り合ったのです。悪い時代でした。私たちは

５年間も付き合っていました。部屋を一つ借りるなどということは，問題になりませんでした。妻と知り合った時，私は 23 歳でした。そして 27 歳で結婚したのです。私の妻とはダンスで知り合ったわけではありません。私の妻はブロンベルクの出身です。彼女は故郷を出なければならなかったので，ブラウンシュヴァイクに来ました。彼らはいわゆる第一次大戦時の避難民，あるいは追放者だったのです。そこで，彼らは『ドイツ東方連盟・青年グループ』*'Deutscher Ostbund-Jugendgruppe'* というクラブも作ったのです。若者の私たちは，グループのリーダーに引き連れられて，知り合ったのです。

私自身は東方連盟の会員ではありませんでしたが，私たちも昔，いわゆる『社会クラブ』*'Gesellschafts-Club'* と言われていた，小さな協会を作っていたのです。昔は，人が５人集まると，社会クラブを作ろう，と言ったものです。そうして，そのクラブの名称をつけたのですが，私たちのは『ペルゼウス』*'Perseus'* という名前でした。名前をつけると，その名前を警察に届け出ました。そして，クラブのバッジを作らせました。それから，ダンスホール入場券を手に入れるために，会員を募って，10 人か 12 人の会員を集めました。ダンスホールに入るには，お金がかかるので，入場券を手に入れなければならなかったのです。クラブは許可されました。それでダンスホール入場券が手に入ったので，その入場券でダンスを楽しみました。1922 年から 23 年のインフレの時代のことです。まだ覚えていますが，本当に素晴らしいホールが本当にたくさんあったのです。当時は，いつもピアノとバイオリンだけの演奏者２人だけの音楽が流行っていました。どれも素晴らしいホールで，居心地も良かったのです。インフレの時代でしたから，今日稼いだお金は，翌日，１ポンドの豚肉ソーセージを買うと消えてしまいました。そこで，私たちは稼いだお金を賢く使いました。もちろん楽しむためにです。今もまだハンブルガー通り *Hamburger Straße* にありますが，『ボックス・テラッセ』*'Bock's Terrasse'* に通いました。夕方になると，主人の所に行き，「今，これだけのお金があるけど，これで何を食べられるだろうか？」と聞きます。すると，「わかったよ」というわけで，おいしい食事や「心地よい夕べ」を楽しめたの

です。支払いの時に「はい，この金で頼むよ。つりはいらないぜ」という調子でしたが，その翌日は，そんなわけにはいきませんでした（：インフレのため）。狂った時代でした。本当に狂った時代でしたとも。

親戚の中でも，ある親戚の家族とは，お互いに訪問し合いました。母には一人の姉がいましたが，彼女の家にも2人の子供がいました。上の息子は機関車の運転手でした。この親戚とは，いつも一緒にいました。父の同僚と訪問し合うというような付き合いはありませんでした。昔は酔っぱらいの父親をもっている子供たちがいたものです。しかし私の家では，そういうことはありませんでした。昔は，復活祭，聖霊降臨祭，クリスマスに「ふん，ふん，ふん，いい臭いがする！　パパが葉巻を吸っている。」という風でした。

私自身は，5年前までタバコをすっていましたが，やめました。私は少なくとも5年間，タバコを吸っていません。私は，昔は居酒屋などには通いませんでした。私たちが外出するとしたら，それは今でいうところの感じの良いカフェーでした。昔は，演奏者が2人いるような，そんなカフェーが至るところにありました。それが，私たちの外出でした。飲み屋に行くとか，カウンターに座るなどということは，私はしませんでした。